

# メンズウェアの機能性とデザイン

Functional and a design of the men's wear

Bunka Fashion Graduate University

Keiko Narukawa

Shinichi Kushigemachi

文化ファッション大学院大学

助手 生川 恵子

教授 櫛下町 伸一

要旨：装飾性よりも実用性を重視してきたメンズウェアにおいて、近年では若年層を中心に多様化したデザインが受け入れられつつある。しかしあくまで革新ではなく、発展としての変化・進化である。今回の研究ではワークウェアというまさに実用性、機能性に特化して進化を遂げてきたジャンルに着目。その仕様やデザイン特性について時代背景を交えて解析する。それに対して現代的でオリジナリティを追求した柄をデジタルプリントすることで、現代のメンズウェアにおける機能性とデザインの新しい可能性を探る。

## 1. はじめに

ワークウェアとは、その名の通り仕事着のことである。仕事の種類によって機能やデザインが異なり、それぞれに適したかたちで発展してきた。現代のファッションにおいては、作業服の機能やデザインを取り入れた“カジュアルウェア”としてその名称が使用される場合も多い。

コレクションにおいて、近年は毎シーズンと云っていいほど、どこかのメゾンがワークやミリタリーのディテールを取り入れている。これはメンズ・ウィメンズのどちらにも言えることではあるが、特にメンズコレクションは、やや活気が出て来たとはいえトレンドの移り変わりがゆるやかであり、また全体的には市場の弱体化が目立つ昨今においては、ある意味当然の現象なのであろう。

2010年8月には、高橋盾 (UNDER COVER)、尾花大輔 (N. HOOLYWOOD)、宮下貴裕 (タカヒロミヤシタ ザソロイスト) の3名のデザ

イナーが「Dickies」とコラボレーションし、オリジナルアイテムを伊勢丹メンズ館において発表した。「Dickies」は、1918年にその前身となる会社が設立され、アメリカの産業革命とともにワークウェアの分野で定着したブランドである。40年代に米国陸軍の制服、50年代には石油労働者の作業着を生産するなど、その確かなモノ作りは広く浸透していった。日本では現在、タウンウェアとしても認知されており、パンツの後ろポケットに縫いつけられたブランドタグは、特定の若者に魅力的に映っている。

尾花大輔は、WWD ジャパンの取材に対して、「ワークウェアには無駄がないから、デザインする際にプラスオンが可能で、その反面、引くこともできる。デザインソースとして適している。」と発言している。

そこで今回、働く人間の服として、時代・環境の中で独自に変化をしてきたワークウェアを通して、メンズウェアのこれまでと、今後について考えてみた。

## 2. 研究方法

ワークウェアの特性や歴史について調査するとともに、そこから発想したオリジナルのデザインで作品を製作することが主な研究方法である。そして、その作品の一部を2010年夏期特別講座「デザインメソッド」にて、パターン解説を交えて紹介した。

デザイン発想の手段として、さまざまなワークウェアの特性をデザインに取り入れるとともに、手元にあるデッドストックのパンツのディテールや、リーバイスのエンジニアドジーンズのパターンを分析する事で、その機能の理解に努めた。

ワークウェアの要素として重要である“動作特性に対応する”という点にも留意し、立体感を意識したパターンを作成した。

また、2010年9月8～10日に行われた企画提案型企業グループ「こだわりの布」7社展にて発表される開発素材の提供を受け、その素材特性を生かすことにも配慮した。

## 3. 研究結果

### (1) 作品①-デザイン発想



図1は、カバーオールの要素を取り入れた上着と、デザインシャツ、米軍用ミリタリーパンツからヒントを得て着想したデニムパンツの3アイテムで

図1 作品①

構成している。

カバーオールとは、本来つなぎになった服の一種であるが、時代とともにワークウェアがタウンウェアとして認知されていく中で、ウェストから下を切り離れた上着にも使われる名称になっている。現在市場に出ているカバーオールはデニム地や厚手の葛城、ダック地などの素材を使用したものが多く、シンプルなシルエットの中にこだわりのディテールを盛り込み、ブランドの独自性を表現したものが多い。

今回の作品は、厚みや風合いの違う異素材を組み合わせ、スポーツウェアなどに使用されているポリテープでの装飾を施した。また、本学で所有しているデジタルプリントの機器を使用し、テキスタイルデザインとした。

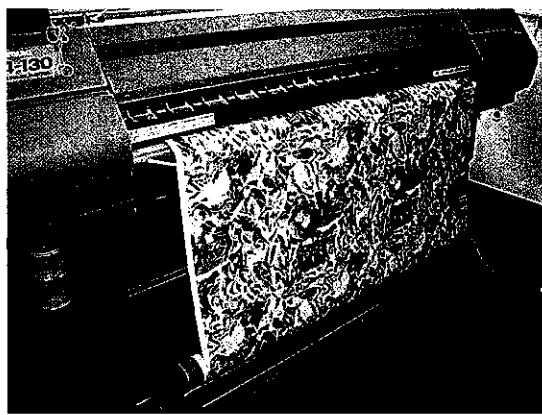


図2 プリンター

作成した柄のデータを図2のプリンターで転写紙にプリントする。それをプレス機で生地にも熱圧着させ、柄を転写する。生地は福井の有限会社三澤機業場から提供を受けたポリエステル100%の生地、縦糸に透明フィルムを使用している。薄く光沢のある生地、転写プリントの分散染料との

反応が良く、非常に鮮やかな色彩を実現できた。



図3 ミリタリーパンツ

股上が深く大腿部の太いルーズなシルエットは、BDU(Battle Dress Uniform)等のパンツの上から着用することを目的としているためである。

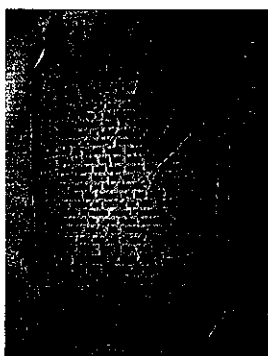


図4 ラベル

右後ろポケットの袋布に縫い付けられているラベル(図4)から読み取ることができた。そこに記載されているストックナンバーや発注番号から米国政府所管の物品であることや国防兵站局(DLA)の発注で生産されたことがわかった。

6コのポケットすべてにフラップが付き、

デニムパンツは、自身が所有している米軍用ミリタリーパンツ(図3)を分析することからその製作がスタートした。このミリタリーパンツは、1985年製で現在は生産されていない。

股上が深く大腿部の太いルーズなシルエットは、BDU(Battle Dress Uniform)等のパンツの上から着用することを目的としているためである。素材は、綿50%、ナイロン50%の高密度の厚手生地

で、防寒性、防風性、耐久性等に優れている。これらの情報は右後ろポケットの袋布に縫い付けられて

金属性のドットボタンで開閉する。袋布にはスレキではなく共布を使用している。

また、サイドのポケットは、入れた物の落下を防ぐためにフラップの前部分を固定するなど、耐久性と安全性を考慮した作りになっている。(図5)

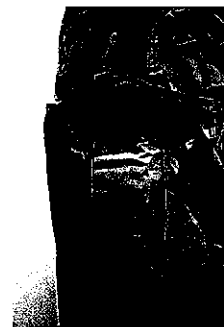


図5 ポケット

さらに、サイドのポケット側面のマチにはボタンホールと同様の穴が開けてある。そこから通常はポケット内部にしまわれている2本の紐が出せるようになっていて、大腿部を縛って固定することができる。その用途は主に止血するためのものと思われる。

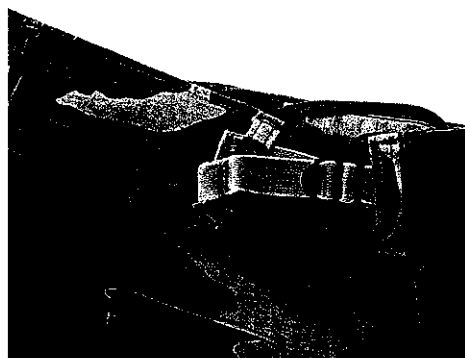


図6 ウエスト部分アジャスター

両ウエスト部分は見返し仕立てになっており、サイドに付いたアジャスター(図7)で10cm程度のサイズ変更が可能である。

内側にはサスペンダーを装着するためのボタンと、表には計7本のベルトループが付いている。

カーゴパンツのデザイン要素を多く取り入れたミリタリーパンツであり、機能性を追求した細部へのこだわりが感じられる。

これらの要素の中で、現代のタウンウェアとして採用すべきディテールやデザインを考慮し、今回の作品製作（図 7）に取り入れた。



図 7 デニムパンツ

素材は、岡山県にある株式会社ワン・エニーから提供を受けた 13,5 オンスのデニム地である。本来デニム地は良くも悪くも色落ちするが、それはインディゴ染料の特性であり、デニム地の大きな魅力である光に当たった際のインディゴならではの藍の青さは、他の染料では再現が難しいとされている。そこでこの生産企業では、旧式織機で織り上げたデニム地を、ずっと下ろし立ての風合いのまま保ち、色移りの心配のない素材に作りたいたいという思いから開発が行われたのである。試行錯誤の中で、反応染料に特殊な薬品を加えることで光の反射を抑え、本物のインディゴ染料と遜色ない色目を再現した。また、反応染料のメリットを生かした堅牢度の高い生地となったのである。

## (2) 作品①-パターン解説

パターンは図 8 の通り、袖の肘部分で身体の動きに合わせた立体感を出すために、切り替えの位置でダーツをとった。カフスは、従来のカバーオール袖口に多く見られるステッチの曲線を切り替えとして表現

し、それを利用してダーツをとった。また、フードにも、かぶった際に顔の曲面に沿うようにダーツをいれた。

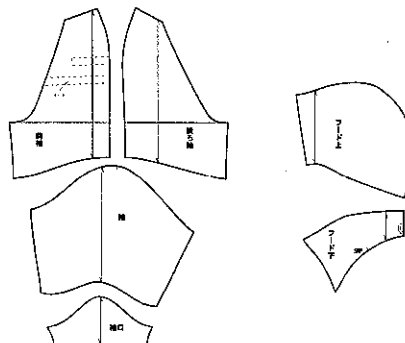


図 8 袖とフードのパターン

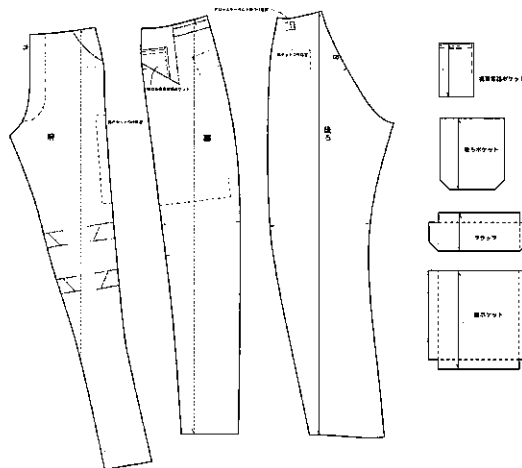


図 9 パンツのパターン

パンツのパターンは、図 9 のように 3 面で構成することで脚の形とその動きに対応した立体感のあるパンツを製作した。特に膝部分は曲げ伸ばしがしやすいよう 2 段のタックを入れた。これは、参考資料のミリタリーパンツにも見られたディテールである。

ポケットは、参考資料の 6 コに加え、右前にのみ携帯ホルダーを付け、計 7 コ。サイドのポケットにはマチを入れる事で立体



図 10 右前ポケット

スマートフォン（携帯電話）が収納できるサイズに設定。また、ステッチで柄を描き、デザインポイントとした。（図 10）

### （3）作品②-デザイン発想



図 11 作品②

混紡地にはオリジナルの柄をデジタルプリントした。

前中心をファスナー開きにし、フードをつける事でよりカジュアルな印象にした。フードは、被っていない状態のときに、アクセントとなるよう通常よりも大きめのサイズで製作した。

感を出して、シルエットにボリューム感を出すと共に、多くの物が入れられる大きさにした。

携帯ホルダーの大きさは、現在流通している一般的な

スマートフォン（携帯電話）が収納できるサイズに設定。また、ステッチで柄を描き、デザインポイントとした。（図 10）

図 11 は、フード付きベストとリーバイスのエンジニアドジーンズのパターンをヒントにデザインしたデニムパンツである。

フード付きベストは素材にデニム地と、ナイロンとポリエス

テルの混紡地を使用。

デニム地の製品において、重要なデザインポイントになるのがステッチワークである。糸の色、太さはもちろんのこと、針目の長さや本数など、



図 12 ベスト後面

各メーカー・ブランドが細かなこだわりをみせる。平行のステッチは「レイルロードステッチ」と呼ばれる。ステッチをどのようにかけていくのかを想定しながらパターンを作成し、効果的なデザインポイントとなり得る事を意識した。また、強調したい肩の切り替えパーツは、肩先にステッチをかけず作品としてあえて差別化した。（図 12）

デニムパンツは、リーバイスのエンジニアドジーンズのパターンを分析し、その特性を生かした形で、独自のデザイン性をプラスするというアプローチで作成した。

そもそも、ジーンズの始まりは 19 世紀半ばのアメリカで砂金が発見されたことにある。革命の嵐の中、一攫千金をもくろむ人々が大挙してアメリカ西部を目指した。平服では穴場での作業に耐えられず、破け、穴が開いた。そこで堅牢なコットンキャンバス地を用い、丈夫な縫製と動きやすいパターンの服が生まれたのである。

キャンバス地の作業ズボンに金具の鉤を

打ちつけたのは、ドイツ系ユダヤ人移民のヤコブ・デイビスという男性で、1870年代のはじめにはすでにそれを販売していた。ズボンを縫っている最中に馬用のブランケットにストラップをつけるために使っているリベットに着目し、ズボンのポケットの隅に打ち付ければ、ズボンが丈夫になり、より長持ちするのではないかと考えた。

それを特許取得(1873年取得)の依頼と、販売権の譲渡を目的にリーバイ・ストラウスのところへ持ち込んだ。このときリーバイは織物商を母体とした事業で成功をおさめていた。

ジーンズの元となったのはオーバーオールであり、1930年代にそのかたちを整えていった。リーバイ織物商会のリベット付きパンツは、現在のジーンズとは異なり、太いシルエットや仕立てが作業ズボンに限りなく近い。リーバイスでは1950年代までこのパンツを“腰丈のオーバーオール(ウェストオーバーオール)”と呼んでいた。第二次世界大戦後、画一的な社会を創り始めたアメリカで、映画やテレビの中で日常着としての捉え方をされるようになったオーバーオールはファッションとして認知されるようになる。

1955年、リーバイスは初めて紙ラベルに「アメリカズ・オリジナル・ジーンズ」というフレーズを刷り込んだ。実はそれよりも早く1947年にラングレーが“ジーンズ”という文字を革のラベルに刻印していた。つまり、'40年代後半には、リベットを打ち付けたブルーデニムパンツをジーンズと呼

ぶ事が一般的になっていた。

ジーンズがファッションとして認知されるようになった経緯は前述したが、中でもシネモードとしての発展が重要なポイントになる。マーロン・ブランドの『乱暴者』(1953年)、ジェームズ・ディーンの『理由なき反抗』(1955年)、エルヴィス・プレスリーの『さまよう青春』(1957年)などがその象徴的な作品である。こうした映画に影響を受けた若者達によってジーンズは大流行するのだが、その背景には、この時すでにジーンズが反骨精神を表す着衣とされていた事にある。ファッションは階級や身分、職業などを視覚的に一瞬で認識させるものである。作業着として生まれてきたジーンズは労働者が身につけるもので、それを学生や労働者でない若者が身につける事は、大人や社会、権力に対する反抗の意思表示であった。したがって、アメリカのハイスクールではジーンズの禁止というドレスコードまで存在していたのである。

そんなジーンズのイメージを払拭したのが、1950年代終わりから60年代半ばに登場したホワイトジーンズであった。これは、ドレスコードに触れる事のないキャンパスファッションとして大流行する事となった。

そこで、作業着としての機能を盛り込んだエンジニアドジーンズのパターンを応用した作品を、あえてホワイトデニムで作品にすることを思い立った。



図 13 パンツ後ろ

裾に向かって細く、小腿から下にフィットしていくようなデザインにした。膝周りの立体感を表現したパターンの特性をそのままに、全体のシルエットを上から下にむかって極端なものにする事で、1本のパンツにアクセントを持たせた。これは、ジーンズが“ボトム中心の発想”という新しい着こなしの概念を与えてきたアイテムである事に由来している。1970年代のジーンズ大流行の時代に確立された、いわゆるボトムルックを創りたいと思いからデザインをした。

裾に向かって細く、小腿から下にフィットしていくようなデザインにした。膝周りの立体感を表現したパターンの特性をそのままに、全体のシルエットを上から下にむかって極端なものにする事で、1本のパンツにアクセントを持たせた。これは、ジーンズが“ボトム中心の発想”という新しい着こなしの概念を与えてきたアイテムである事に由来している。1970年代のジーンズ大流行の時代に確立された、いわゆるボトムルックを創りたいと思いからデザインをした。

#### (4) 作品②-パターン解説

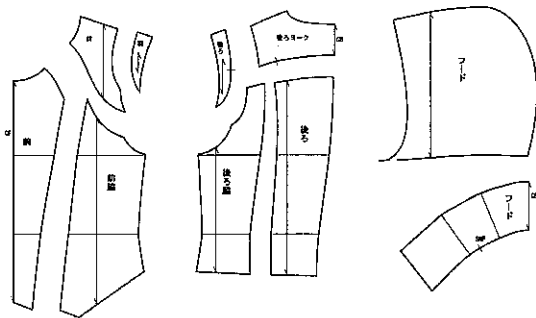


図 14 ベストのパターン

ベスト身頃のパターン(図14)は、ベーシックなドレスベストのパターンからの展開で、デザイン性と機能性を兼ね備えた構造線となっている。

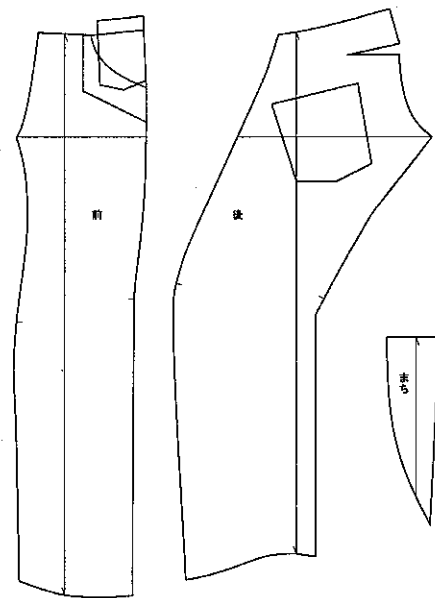


図 15 エンジニアドジーンズのパターン

リーバイスのエンジニアドパンツのパターンでトワルを組み立ててみたところ、股上は浅く、比較的タイトな印象のシルエットが見えた。ワークパンツといえば、ゆとりがしっかりと入ったものを思い浮かべがちであるが、このパンツの様相は一見意外であった。しかし、そういった疑問は横からのシルエットと、このパターンの形状を読み取る事で解消される。足の動きの中で重要視すべき点は膝の曲げ伸ばしであるのは当然の事だが、このパターンは切り替え線が通常のパンツのそれとは異なったラインを描いている。人間の体はもちろん三次元であるが、一般的なジーンズのパターンにおいて前後の切り替え線は直線的だ。したがって、このパターンはより立体的であり足の動きに対応するとともに、単なるワークパンツの域を超えたファッション性の高さが認められる。

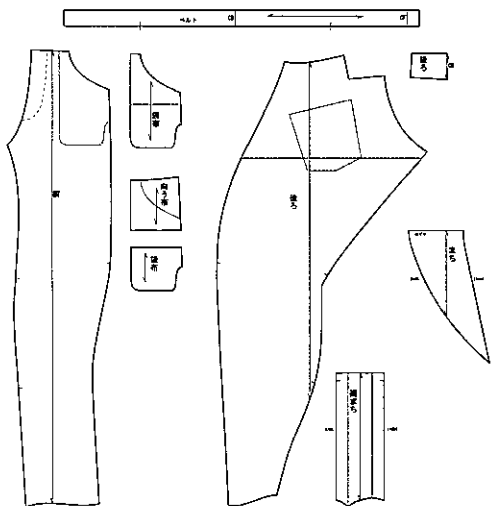


図 16 パンツのパターン

製作したパンツは、前身頃のパターン形状はほぼそのままにし、後ろ身頃の股ぐりを深くとり、幅も広くし、マチはカーブを強くした。これによって胴回りにゆとりが生まれた。(図 16)



図 17 パンツ裾

裾は、フィットするように細くなっているのに着脱のためにマチを含んだファスナー開きになっている。(図 17)

また、デザインポイントとして、後ろ中心にある切り替えパーツには、レース地を重ねて縫い込み、ドレスシーな印象を加味した。

#### 4. 考察

今回の研究では、ワークウェアの特性やその発展の歴史に着目するとともに、自らのデザインによる作品を制作する事で進めてきたが、改めてファッションとは、衣服とは何たるかを考えさせられた。

ファッションは様々なジャンル分けがされている一方、流行という名の下に混ざり合ったスタイリングがなされている。その組み合わせやコーディネートにとらわれがちで、これは特にレディースファッションに言える事ではあるが、最近ではメンズファッションにも見られる傾向である。そんな中で、ただの旬なデザインソースとしてその要素を取り入れているだけでは、表層の模倣でしかなく、身につける人にもすぐ飽きられてしまう服にしかならないのではないだろうか。

ワークウェアは働く人の為に生まれてきた衣服であり、最も身近な仕事道具として歴史を創る一端を担ってきた事は間違いない。そういった経緯や空気感を感じ取る事は、もの作りにおいて大切な事である。

一方で、メンズファッションが革新をもたらせられない要因もそこにあるのではないだろうか。過去の定説にこだわり、既製の枠からはみ出る事を忌み嫌う考え方が、その長い歴史の中でアーカイブをつつくような衣服しか作りださなかったことに起因していると思う。

ワークウェアは、その時代に必要とされ、必然的に生まれたものである。未来のファッションを生み出す時、過去の人々がそう



したように、その時代に本当に寄り添ったデザインをしていく事が革新につながるのではないかと感じ、またその困難も想像しつつ今後のメンズウェアにおおいに期待したい。

## 5. 図録

- 図1 作品①
- 図2 プリンター
- 図3 ミリタリーパンツ
- 図4 ラベル
- 図5 ポケット
- 図6 ウェスト部分アジャスター
- 図7 デニムパンツ
- 図8 袖とフードのパターン
- 図9 パンツのパターン
- 図10 右前ポケット
- 図11 作品②
- 図12 ベスト後面
- 図13 パンツ後ろ
- 図14 ベストのパターン
- 図15 エンジンアドジーンズのパターン
- 図16 パンツのパターン
- 図17 パンツ裾

## 6. 参考文献

- 1) 吉村 誠一 『メンズファッション大全』  
織研新聞社, 2007
- 2) 婦人画報社書籍編集部 『JEANS ジーンズ』  
婦人画報社, 1988

- 3) 今井今朝春 『ワークウェア』  
ワールドフォトプレス, 2009
- 4) CALLY BLACKMAN  
『メンズウェア 100 年史』ブルース・インターアクションズ, 2010
- 5) ウィメンズ・ウェア・デイリー・ジャパン 『WWD』  
INFAS パブリケーションズ, 2010